

大学の体育会部活における就職活動に関する研究

－OB ネットワークに着目して－

菊池光輔（筑波大学）

1. 先行研究の検討と研究の目的

体育会系が就職活動において有利になるという「体育会系神話」は、多くの人が認識している言説である。しかし近年、体育会系のキャリアが問題視されるなど、体育会系の就職活動を取り巻く環境が変化してきている。束原（2021）は、このような体育会系内での就職結果の格差を踏まえ、「エリート体育会系」（偏差値の高い大学の体育会系）と「ノンエリート体育会系」（中堅以下の偏差値の大学の体育会系）への分化を指摘した。そして、「エリート体育会系」において就職結果が良い理由について、大企業と大学の間に対応関係があることを指摘している。すなわち多くのOBネットワークを保有しているからこそ、そのネットワークを利用して「エリート体育会系」が良い就職結果を得ているということである。

以上のような先行研究を踏まえ、本研究では「体育会系神話」を出発点として、その優位性を保っているOBネットワークに着目し、現在の体育会系の就職活動においてOBネットワークがどのように機能しているのか、そしてその背後にある体育会系の就職活動を取り巻く社会的文脈を明らかにしていくことを目的とする。

2. 研究方法

- 1) 対象者：筑波大学蹴球部
- 2) 調査方法：①蹴球部OBの勤務先データを用いて、蹴球部の就職活動の傾向を分析する。②2022年度卒の部員のうち、一般企業への就職が決まっている13名へのインタビューを行い、どのように就職活動を進めたのか、OBネットワークの利用の仕方の二点を調査する。

3. 結果

1) OBの勤務先データの検討

勤務先データから明らかになった主なことは、直接的な面識の有無がOBネットワークの利用に影響しているということである。

2) 13名へのインタビューの検討

インタビューから、①OBネットワークを利用した選考の優遇は、OBリクルーター制度が常態化していた1990年代に比べ、大幅に減少していること、②OBネットワークの利用は現在の就職活動において特段重視されている項目ではないことの二点が明らかとなった。

4. 考察

調査結果より、現在の体育会系の就職活動においてOBネットワークを利用している人は限定的であることが明らかとなった。またそもそもOBネットワークが蹴球部において少ない。このような事態の主な原因と考えられるのが、就職活動のプロセスの変化である。体育会系独自のOBネットワークを利用した就職活動のプロセスは失われ、現在は一般の学生も体育会系の学生も区別されず、同じプロセスで就職活動を行い、内定を獲得していく。体育会系の学生はOBネットワークやインターネットの情報といった資源を利用し、情報を取捨選択し「主体的」に就職活動を行っている。このように「主体性」を持って就職活動を行っていることが、かつての体育会系の就職活動と大きく異なる部分である。これらを踏まえると、現在の体育会系の就職活動は、学生自身が体育会系というカテゴリーから脱却し、社会に出るためのプロセスへと変化していったといえるだろう。

5. 参考文献

- 1) 束原文郎，2021，『就職と体育会系神話—大学・スポーツ・企業の社会学』青弓社。